ミサの再開

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

ミサの再開

イタリアでは、本年３月から５月にかけてのコロナウイルスの急速な蔓延による感染を防ぐため、さまざまな規制が政府より発令された。その一つが集会が厳しく制限されたことである。そのために、カソリック教会におけるミサも開けなくなった。そのために、ヴァチカンのサン・ピエトロ教会をはじめとして、ほぼすべての教会が閉鎖され、日曜日のミサはもちろん、平日のミサも中止されてしまった。ただし、ローマ法王の個人的ミサは、国立テレビ放送 RAI によって毎朝７時から１時間放送された。

コロナウイルスの感染状態も平衡状態を保つようになった５月上旬より、厳しかった規制事項が次第に緩和されてきた。そこで、「信教の自由」を標榜するイタリアの司教団より、集会の自由の規制緩和が要望された。イタリア政府も一考をめぐらし、教会でのミサの再執行を制限付きで許可した。これにより、元法王ヨハネ・パオロ２世の誕生 100 年を記念して、５月 18 日より、サン・ピエトロ教会を再開し、数の規制はあるが、ミサに参加することができるようになった。

規制のいくつかを記そう。参列者については次の通り。マスク着用は大原則。人と人との距離はしっかり保つこと。教会に入ってからは、隣の人と最低１メートル 50 センチ離れること。教会のドアは開放のまま、つまり、ドアの取手に誰も触れないこと。37.5℃以上の体温の人の入場禁止。この２、３日の間にコロナウイルスの感染者と接触した者の入場禁止。教会側としては、壁、彫刻、床、さらにミサに使うマイク、聖書など一切を消毒しておくこと。ミサ終了時のホスティアの授受には、神父は専用手袋を使用し、そしてそれを拝受する信者の手にのせること。平和を希求する信者同士の抱擁や握手は禁止。ミサに使われる小雑誌の配布を禁止。懺悔の儀は広いところで行うこと。教会内の聖水器は空にすること。

この規制は、カソリックに対してのみならず、イタリアに存在する各宗教に対しても同じ効力を発揮するものである。

こうした状況の下では、ミサへの出席者は少ない。５月 31 日は、復活のキリストが天国に帰った「５旬節」の日だ。信者たちがサン・ピエトロ広場に正午 12 時に集まって、法王のアンジェルスの訓示を拝聴する儀も再開された。しかし、広場に参集した信者の数は、思いのほか少なかった。法王のこのアンジェルスは２カ月余の日曜日には、広場に人々が参集することは禁止されていたので、法王は図書室でアンジェルスを述べ、それが終わった後、いつもの窓を開け、眼下の無人の広場に向けて祈りを捧げていた。法王はこの日、次のように語った。「このコロナウイルスの危機を脱するためには、神の光が、精霊の力が必要だ。さらに人間として、一致団結する必要がある。我々はコロナウイルスの患者のために尽力している医師や看護師に感謝すべきだ。この時期に経済的な衰退を嘆いている人もいるが、人命は経済よりも大切である。我々人間は聖霊の宿る神の体である。聖霊は神を、キリストを見せてくれた。世界は進歩主義者も保守主義者も見せてくれるが、聖霊は神の子達を見せてくれたのだ」と。

聖エジディオ共同体のイニシアティブ

本年の２月末くらいから、イタリアではコロナウイルスの蔓延によって次々と高齢者が命を落としていった。この時期、治療に使う人工呼吸器の数が少ないので、まだ未来がある若者に優先的にその器械が回されるために、高齢者が命を落としているのだという噂が流れた。しかし、若者の中にも感染者が現れ、死亡する者も出て来た。それ以降、そのような流言は影を潜めた。そのような動きの中、立ち上がったのが聖エジディオ共同体である。「今日の文明、文化、歴史を築いて来たのは、高齢者たちだ。その人たちは今必要がなくなったからと言って、直ちに死んでいいというものではない」という主張の下、「高齢者は未来である」というキャンペーンを展開したのだ。それには、EU 内の多くの政財界のみならず、スポーツ界からも芸術方面からも多大の支持が寄せられ、署名運動も展開された。この運動に関連して、ロンドンから寄せられたある書簡には、「私たちはまだ、虫を見る世界を持っている。また、空気の良い匂いも、鼻をつく嫌な臭いもわかる。我々は健全な過去に戻ることができるだろう。母なる大地はまだ生きていたいと言っている。そこで高齢者と若者との世代を超えた対話も進んでいくだろう」と記されていた。

聖エジディオ共同体は、アフリカのコロナウイルスの感染拡大以前から、アフリカの貧困地区に感染が広がったら大変なことになると警告を発していた。その警告のおかげで、モザンビーク、タンザニア、中央アフリカなどでは適切な処置がなされたため、コロナウイルスの災厄が大きく広がらずに済んだのであった。

中国との外交問題

2018 年９月 22 日、ヴァチカン市国は、中国北京政府と暫定的外交関係を樹立した（本誌 2019 年２月号「ヴァチカン便り」36 参照）。その合意書では、２年後、つまり 2020 年９月を目標にこの暫定的な条件を見直すように表記している。ところが、2020 年２月から６月までは、コロナウイルスの世界良的な蔓延を受けて、今年９月の会談は 2021 年９月に延期された。双方からは、さらに具体的な話し合いに身を投じたいところで、両者の関係には多くの問題が存在しているようだ。２年前の暫定的取り決めの内容については、ヴァチカン側は一部の人しか知らない。北京側は当事者たちの極秘事項だ。ヴァチカン側としては、「信教の自由」のない中国共産党の支配体制の国に対して、良好な関係を維持することに懸念を示している者も少なくない。

香港のジョセフ・ゼン枢機卿は、現状の外交関係には反対している。ビルマのチャールス・ボ大司教も反対している。しかし法王をはじめとしてその上層部も、中国の上層部も両国の外交関係樹立を喜び、その改善が進むことを期待している。法王は、コロナウイルスが中国内で感染拡大しはじめたときに、イタリア中の薬局から、マスク70万枚を集めて中国に送り、中国指導部から感謝されている。去る２月、コロナウイルスがヨーロッパ中に蔓延する前、ヴァチカン側のイニシアティブでヴァチカン側の外相級の人と中国の外相役のワン・イーとがドイツのミュンヘンで会談している。その席で中国側は、西洋側の中国に対する偏見を、あるいは習近平に対する偏見を、ヴァチカンの力で取り除くように依頼していたのだった。